AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2024 年 1 月 25 日　VOL.47　第 308 号
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

2024 年
冬 号
冬

救える命があればどこまでも

新理事長就任のごあいさつ

特定非営利活動法人 AMDA 理事長　佐藤　拓史

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

2024 年、新しい年を迎えました。

平素より AMDA に対し格別なご支援を賜り厚くお礼申し上げます。この度、AMDA 理事会にて理事長に就任いたしましたことをご報告申し上げます。

私は岡山で生まれ育ち、岡山市立中山中学校、岡山大安寺高校で学びました。当時は、アフリカでも東南アジアでも中東でも戦争が絶えることなく、世界では毎日多くの人々が犠牲になって命を落としていました。食べることすら難しい国々では、毎日栄養失調で亡くなっていく子どもたちが絶えません。本当なのか？どうして貧困はなくならないのか？高校生の頃、不思議で仕方ありませんでした。大学生になった頃から、世界で何が起こっているのか自分の目で見て知りたくて、世界中を旅することを始めました。自分で行動してみないと何事も納得できないと思っていたからです。たくさんの国を旅して必死に生きる人々の現実を知り、自分に何かできることがあるのか、医師になった今でも考え続けています。

ハリケーン発生に伴うコレラ感染拡大に対応した緊急支援（2016 年ハイチ）

熊本地震発生後、現地の避難所で活動する佐藤理事長（2016 年）

AMDA では、これまで国内外の災害医療支援、海外への日本の医療技術移転に携わってきました。背景の異なる人たちと一緒に時間を共有することで深く理解し合い、初めて自分のできることが見えてきます。誰かが困っていたら、国籍や宗教の違いなど関係なく、自分のできることをするのは当たり前だと思っています。医師としてやることも、全く同じです。できることがある、それは嬉しいことです。

ウクライナ人道危機発生に伴う緊急医療支援（2022 年ハンガリー）

菅波先生の築き上げた AMDA が、世界の大きな変化の中でも普遍的な意義を持ち続け、未来に継続していくこと。そのための役割を担うことが自分の天命かと考えています。まだまだ未熟ですが、いろいろな方々のご協力を賜りながら、少しずつでもお役に立てればと思っております。

前任者と変わらぬご支援ご高配を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

さとうたくし◇ 1965 年生まれ。岡山県立岡山大安寺高校を卒業。東京大学卒業後、浜松医科大学を経て救急医療、国内外の災害医療に携わる。2002 年にアフガニスタン難民医療支援活動に参加して以来、スーダンでの内視鏡支援活動や、カンボジアでの医療支援活動等に従事。2015 年のネパール大地震緊急支援を皮切りに、特定非営利活動法人 AMDA の緊急人道支援活動に参加。熊本地震、ハイチにおけるコレラ感染拡大、熊本球磨地方豪雨、ウクライナ人道危機等の際に派遣される。医療技術支援としては、ネパール東部ダマックでの内視鏡技術支援、モンゴル国立医科大学病院での内視鏡技術移転、ならびにモンゴルの医療人材を対象とした救急医療セミナーやトレーニングを実施。2019 年にはモンゴル保健大臣より名誉勲章が授与される。

理事長退任のごあいさつ

特定非営利活動法人 AMDA 前理事長　**菅波　茂**

明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、清々しい気持ちで新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。AMDA の新たな門出に先立ち、この度、AMDA 理事会にて理事長の職を辞することになりました。この場をお借りして皆様方にご報告申し上げます。

1984 年に AMDA を設立して今年で 40 周年を迎えました。私個人としては喜寿（77 歳）を迎え、二重の意味において AMDA 理事長交代の時期かなと思いました。

幸いにも、後任の理事長として新進気鋭の佐藤拓史医師が引き受けてくれることになりました。彼は AMDA の特徴である国内外の数々の災害医療支援の現場経験に加えて、高度な内視鏡治療と救命救急の技術をモンゴルの国立医科大学教育病院に、内視鏡検査技術をネパール支部のダマック病院に紹介し、次世代の教育に大きな実績を残しています。

佐藤拓史新理事長の世界的視野と医学的実績を背景に AMDA が世界に貢献できる新機軸を展開してくれると期待しています。

世界は 2020 年から始まった新型コロナウイルスパンデミック対策としての世界各国において実施された都市のロックダウンによる経済的ダメージに加え、ロシア・ウクライナ戦争やイスラエル・ハマス戦争により、更なる経済的ダウンをきたしています。これに異常気象による農作物の不作が食糧危機の様相を呈し始めています。また、より根本的な問題として、世界的な不景気とインフレーションが重なったスタグフレーションの暗雲が世界中に立ち込めています。世界史を紐解けば、スタグフレーションの結果として、各国で革命が起きています。

来る世界的大動乱に、AMDA として佐藤拓史新理事長が中心となって結束を固め、適切な対応がとられることを願っています。

なお、理事長の交代に伴い、副理事長は菅波知子に代わって難波妙が就任いたしましたので、合わせてご報告申し上げます。

末筆では御座いますが、皆様方のこれまでのご恩情とご支援に心より御礼申し上げるとともに、今後とも旧倍のご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願いいたします。

1984 年、第 1 回 AMDA 国際会議（AMDA 設立）

1995 年、岡山空港から支援物資を
チャーター機でサハリンへ

1999 年、アフガニスタンのタリバン政府
を招聘してワクチン停戦に合意

2010 年、パキスタン洪水被災者支援

2015 年、ネパール地震被災現場

モロッコ地震被災者緊急支援活動

現地時間2023年9月8日午後11時、モロッコ中部マラケシュから南西70キロにあるハウズ州を震源にマグニチュード6.8の地震が発生。国連人道問題調整事務所（UNOCHA）の発表によれば、被災者は38万人に上りました。AMDAは、13日に看護師2名を現地へと派遣。同国政府の方針により単独での活動が制限されたため、現地協力団体『シーファ・ファウンデーション』と共に救援活動に参加しました。

14日にモロッコに到着した一行は、翌日に現地協力団体と合流し、ハウズ州タハナウト周辺でニーズ調査を実施。16日から17日にかけて、オカイムデン付近の村や、タハナウトから車で約2時間の僻地で行われた医療支援活動に参加しました。発災から一週間が経過していたこともあり、持病のある患者や応急手当後の対応が中心となりました。また20日には、マラケシュ空港近くの倉庫にて、支援物資の仕分け作業に参加し、薬の使用期限の確認や衛生用品の仕分けを行いました。21日から28日にかけては、ティフェル、イミンタノート、ティジ・ウッスム、アヌブドゥール、エイト・モーレイ・アリの計5ヵ所の村で巡回診療に参加しました。細い山道を約3時間かけて移動する中、崩落箇所の迂回を余儀なくされる場面もありました。

訪れた村々の多くは医療インフラが整っておらず、血圧測定の様子ですら子どもたちの興味の的でした。一方、子どもたちが描いた絵には倒壊家屋や負傷者が描かれており、メンタルケアの必要性が確認されたことから、これをチーム全体で共有しました。余震を恐れ、屋外で避難生活を送る住民の姿も見られる中、現地では、一刻も早い生活の再建を目指して、学校用のテントの設置や、建築家による仮設住居の設置などが本格化していました。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）

ハイチ・国内避難者支援活動

AMDAハイチ支部は、9月7日から10日および10月19日から22日の計8日間、ハイチの首都ポルトープランス（Port-au-Prince）にて、国内避難者を対象とした支援活動を行いました。武装集団による殺害や放火の激化により居住地を追われキャンプサイトに避難している方々に、健康診断と医薬品および飲料水を提供しました。9月には、654人の国内避難者（大人488人、子ども166人）、10月には549人の国内避難者（大人438人、子ども111人）に、医療支援を届けることができました。

本活動は、キャンプサイトのスタッフによる椅子や机の提供、そしてハイチ保健省によるボランティアの提供やハイチ市民保護局による安全の確保など、様々な協力のもと実施されました。また、患者の症状としては様々見られましたが、高血圧が高い割合を占めていました。避難者の多くは病院に行くことも医薬品を購入することも難しいため、本活動は大変喜ばれ、避難者にとって有益であったという声が多数ありました。

（AMDAスタッフ　大原　瑞萌）

西ネパール地震被災者支援活動

2023年11月3日の日本時間午前3時2分ごろ、ネパールの首都カトマンズから約300キロ離れたジャージャルコート郡ラミダダで地震が発生。157人が亡くなり、多くの建物が被害を受けました。

AMDAネパール支部は、調整員1名を被災地に派遣し、ナルガド市とアトビスコト市の被災者にブルーシート、ブランケット、マットを配布しました。被災地にある古い家はほとんどが壊れていて、住める状態ではありません。被災者は物資を受け取った後、「初めて支援物資を渡していただき、嬉しいです。ありがとうございます」と喜んでいました。これからも被災地は寒い日々が続くため、必要に応じて被災者への支援を行う予定です。

（ネパール担当　アルチャナ　ジョシ）

フィリピン・地元住民健康支援事業

AMDA フィリピン支部は、2023 年 9 月 9 日、首都マニラ近郊のパラニャケ（Paranaque）で、地元住民 300 人への診療ならびに 450 人への食糧配布等を無料で行いました。また、同月 16 日には、サン・フアン（San Juan）にあるバランガイ・ウルビストンド（Barangay Urbiztondo）で、この地域で十分な医療サービスを受けられていない住民に対し、メンタルヘルスを含む包括的な医療支援を行いました。本事業は、AMDA 本部、フィリピン医学生会（PMSA）のボランティアチーム、フィリピン赤十字などの協力のもと実施されました。活動内容は、小児患者 81 人に対する医療サービスや医薬品の提供から、健康管理指導、メンタルケアの一環として行われたズンバ（踊り）や塗り絵に至るまで、多岐にわたりました。

（AMDA スタッフ　大原　瑞萌）

2023 年度第 2 回モンゴル国立鉄道病院医療技術移転事業と協力協定締結

AMDA モンゴル内視鏡技術移転事業ならびに救命救急セミナーが 2023 年 11 月 6 日から 10 日までモンゴル国立中央鉄道病院で実施されました。

◆内視鏡技術移転事業

今回で 7 回目を迎えた内視鏡技術移転事業は、モンゴルの医師免許のもと、国立中央鉄道病院で内視鏡検査が実施され、AMDA 理事の佐藤拓史医師と難波妙が参加しました。患者 30 人に上部消化管の内視鏡検査を実施する中で、佐藤医師は、参加した医師たちに対し、検査画像を基に診断方法についてそれぞれの判断を聞きながら研修を進め、患者さんには検査結果を丁寧に説明しました。また、日本から持参した大腸カメラのシミュレーターを使った研修も実施しました。

◆救命救急セミナー

救命セミナーには、病院関係者ならびに関係機関の救急医等 32 名が参加しました。外傷患者の治療は傷病部位によって、診断および治療手技が異なり、様々な知識や医療技術が必要となります。救急医に必要な診断技術や治療法を講義しながら、実際の臨床に即した実践的な診療技術を伝える研修を実施しました。（写真上）

◆モンゴル国立中央鉄道病院との協力協定締結

11 月 10 日、同病院と AMDA は協力協定を締結しました。エルケグル病院長は、「今回の協定は、鉄道沿線に中核病院を複数持つ当院にとって、沿線住民に日本の医療技術を提供する第一歩である」と話しました。（写真下）

（AMDA 理事　難波　妙）

インド・AMDA ピースクリニックの活動報告

2023 年 11 月 25 日、インド・ビハール州ブッダガヤにある AMDA ピースクリニック（APC）は、創立 15 周年を迎えました。母子保健事業を活動の主軸としている APC では、2014 年から現地の産婦人科医による定期妊婦検診を月に 2 回実施。各回平均 30 人が検診を受け、必要に応じて薬やサプリメントを提供しています。参加者は、「定期的に検診をしてもらえることで、日頃から赤ちゃんや自分の健康に気を配ることができます」と話しました。

また、週に一度、同地域に住む妊婦や母親を対象に、栄養指導や健康教育プログラムも行っており、各回平均して 20 人が参加しています。参加者は「毎月検診に来る意味を理解することができました」と話しました。

（インド担当　アルチャナ　ジョシ）

ネパール子ども病院設立 25 周年式典

2023 年 11 月 2 日、AMDA ネパール子ども病院は設立 25 周年を迎えました。ネパール連邦民主共和国プロチャンドラ・ダハル首相ご臨席のもと、記念式典が同病院で行われ、AMDA 本部から菅波理事長とネパール担当のアルチャナが地域住民 250 人とともに参加しました。またシンガポールからも 2 名の AMDA 支援者が式典に同席してくださいました。

1998 年の阪神淡路大震災後に、日本とネパールの多くの支援者のご協力により設立されたネパール子ども病院。正式名称を『シッダールタ母と子の病院』といい、安藤忠雄建築事務所がボランティアで施設の設計を手掛けてくださいました。ブッダが生まれたルンビニ州ブトワール市にあるこの病院は、ネパールの首都カトマンズ以外では初めてとなる、母子保健に特化した病院です。専門家による治療を行っており、西ネパールの妊産婦や子どもたちにとっての拠点病院となっています。現在は 1 日に平均 8 人の赤ちゃんが誕生しており、2022 年には、外来と救急外来をあわせて 35,000 人の患者さんが受診しました。ブトワール市役所、ブトワール商工会議所、AMDA ネパール支部が協力してこの病院を支えています。

ブトワール市長は式典のあいさつで、「25 年前に建設されたこの病院は日本の皆様からの支援で建てられた病院であり、今後も日本国民の『愛の証』として大切にし、地域の拠点病院となるよう、行政と地域住民が力を合わせて頑張っていきたい」と述べました。これに対し、菅波理事長は、これまで尽力されたネパール関係者への謝辞を述べるとともに、日本側も引き続き協力していくことを約束しました。

また、式典の中で、現在 100 床の病院を、300 床の最新の治療が提供できる病院に建て替えること、来年度より医療専門学校として、看護師、病理検査技師、ヘルスアシスタントの育成を目的とした講座を開講することが発表されました。

菅波理事長『プラシッダ・プラワル・ジャナセワシュリー勲章』を受勲

この度、ネパール連邦民主共和国ラム・チャンドラ・パウデル大統領より、ブトワール市ならびにその周辺地域の母子保健の向上に多大な貢献をしたとして、菅波茂理事長に勲章が贈られました。

この勲章は『プラシッダ・プラワル・ジャナセワシュリー勲章』（“Prasidda Prawal Janasewashree”）と称され、ネパール政府が外国人に授与する最高位の勲章です。勲章の伝達式は、2023 年 10 月 31 日にネパール内務省で行われました。菅波理事長は今回の受勲を受けて、「この活動は AMDA ネパール支部や病院のスタッフ、地域の方々、そして何より日本の支援者の皆様のご協力がなければここまで続けることはできませんでした。この場をお借りして皆様に心より感謝申し上げます」と喜びを述べました。

（ネパール担当　アルチャナ　ジョシ）

■ AMDA 中学高校生会活動報告会 2023

2023 年 10 月 22 日、岡山市北区のオルガホールにて、『AMDA 中学高校生会活動報告会 2023』が開催されました。同年 8 月に行われたネパール研修に関する報告では、「防災の違いを学ぶ」をテーマに現地の学生と交流を行ったことや、”住む場所や経済状況によって 知識の格差や不平等が生じている現状を打開し、今後『BOUSAI』として国際的に広く浸透させるためにはどうすればよいか”について発表が行われました。また 9 月に行われた、高知県黒潮町の中高生との防災をテーマとした交流会については、避難訓練での活動内容をクイズ形式で紹介し、実際に現地で行った避難所運営ゲーム『HUG』を、聴衆を交えて行うなどしました。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）

■『第 17 回復興グルメ F-1 大会 in 南三陸町』が開催されました！

コロナ禍を経て、4 年ぶりに『第 17 回復興グルメ F-1 大会』が、11 月 19 日、宮城県南三陸町で開催されました。（第 17 回復興グルメ F-1 大会実行委員会主催、AMDA 協賛）

当日は晴天に恵まれ、約 1,300 人の方々が南三陸町内外から来場されました。岩手県、宮城県、福島県、栃木県の 6 地域 15 チームが出店し、多くの人々の笑顔と絶品グルメが集まる心温まる大会となりました。今回の開催に合わせて、岡山から 17 日～ 20 日の日程でボランティアバスを運行し、中学生から 70 代まで約 20 名の参加がありました。

18 日は岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市を訪問し、現地の方のお話を伺ったり、3.11 仮設住宅体験館、東日本大震災津波伝承館等を見学しました。

19 日大会当日は、会場の設営のお手伝い、またそれぞれのグルメブースでの盛り付け、案内、笑顔での接客等、一人一人が一生懸命に活動し、4 日間の行程を締めくくりました。

初めて東北を訪れた参加者より、「テレビでしか知らなかった東日本大震災を実際に東北に来たからこそ知ることができた。復興の形も場所により違っていた。人との出会いが自分の将来を考えるいい機会になった」等、帰りのバスで感想をいただきました。

（総務担当　太田　浩子）

■ AMDA こども食堂支援プラットフォームへ食料物資の贈呈

2023 年 11 月 29 日、一般社団法人岡山県労働者福祉協議会様より、魚の缶詰 432 個をご寄付いただきました。AMDA からは菅波茂理事長が謝意を表し、感謝状を贈呈。こども食堂を代表して、一般社団法人『ぐるーん』の河本代表が物資を受け取りました。また AMDA こども食堂支援プラットフォームの直島克樹事務局長より、「岡山県内のこども食堂を対象に、貧困等に限定せず、子どもや家庭が地域とつながる入口として、地域で子どもたちの成長を応援し、その家庭も応援する取り組みになっている」とのメッセージが寄せられました。加えて、12 月 14 日に日本労働組合総連合会岡山県連合会（連合岡山）様より構成組織の 3 団体から米などの食料品、生活用品のご寄付をいただきました。

（財務部長　難波　比加理）

ウクライナ人道支援活動　連携 4 団体の活動報告

現在もウクライナ国内では、深刻な人道状況が続いており、人々の生活は困難を極めています。AMDA は、ハンガリーの 2 団体およびウクライナの 2 団体と合同で、現地団体主導による継続的な支援を行っています。

なお、この活動は外務省の日本 NGO 連携無償資金協力事業としても採択され、ウクライナでの医薬品を含む物資支援などに充てられています。

■ セントミッシェル小児総合リハビリセンター（ウクライナ）

ウクライナ西部に位置するセントミッシェル小児総合リハビリセンターでは、近隣病院の腫瘍科のがん患者に対して、医薬品の提供を行いました。継続的な投薬が必要でありながら、厳しい経済状況が続いているため、患者からは、「支援が本当に嬉しい。生きる希望が湧いた」との声が聞かれました。このほかにも、児童養護施設への食料品や衣料品の配布、避難者受け入れ施設を対象としたベッドリネンの配布など、多岐にわたる支援を継続しています。

■ ダイナスティメディカルセンター（ウクライナ）

ダイナスティメディカルセンターでは、耳鼻咽喉科の疾患を抱える患者に対して、治療を行っています。患者数は平均して月 35 人程度で、治療には 2 時間を超える手術なども含まれます。手術用の麻酔薬が非常に高額なため、手術を受けられる患者の数は限られていましたが、この支援を通じて、より多くの方が手術を受けられるようになりました。また高品質の麻酔薬を使用することで、副作用が軽減され、短期間で仕事や生活に復帰できるようになりました。病院関係者は、「ウクライナの人々に質の高い医療を提供できていることを非常にありがたく思っている」と謝意を述べました。

■ ヴァルダ伝統文化協会（ハンガリー）

ウクライナ西部にあるトランスカルパティア州ベレホヴェ地域には、子どもを連れた母親が東部から多く避難しています。ヴァルダ伝統文化協会は、4 ヵ所の施設に食材を寄付し、子どもたちとその家族に対して昼食を提供しました。一日あたり約 720 食を提供し、いずれの方からも好評で、大変喜ばれました。このほか、同地域の学校 4 校、病院 3 ヵ所、養護施設 3 ヵ所を対象に、7 月より食料品や衛生キット等を継続的に配布しており、受益者の数は月平均で 1,000 人に上ります。

■ メドスポット（ハンガリー）

ハンガリーの医療団体メドスポットは、ウクライナ西部で、国内避難者に対する診察や、メンタルヘルスケアを継続して行っています。不安障害、睡眠障害、うつ病、PTSD など、心理的要因が引き起こす症状が多く見られます。とりわけ思春期の子どもたちに長引く避難所生活に伴うストレス症例が多い印象です。

今後も引き続き、メンタル面に対するケアが必要とされています。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）